

**令和5年度 宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議市町村情報交換会
概要**

区分・会場	仙台 TKP ガーデンシティ仙台勾当台 ホール1
開催日時	令和5年12月6日(水) 午後1時30分から午後3時30分まで
出席市町村 (出席者数)	仙台市(13)、塩竈市(1)、多賀城(1)、東松島市(1)、富谷市(4)、松島町(1)、七ヶ浜町(1)、利府町(2)、大和町(3)、大郷町(3)、大衡村(1) 計31名
アドバイザー (連絡会議会員)	東北こども福祉専門学院 副学院長 大坂 純 氏 仙台市社会福祉協議会 事務局次長 岩渕 徳光 氏 宮城県社会福祉協議会 地域福祉部長 及川 一之 氏
オブザーバー	宮城県仙台保健福祉事務所(1)、全国コミュニティライフサポートセンター(1)
情報交換での 主な意見・内容	<p>テーマ①「コロナ5類移行後の取組や発見」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 以前行っていた事と後は違っている。(ポスティングや対面でしなくなった)行政区で違いが出ている。 ○ 活動が止まったままになっている。(夏祭り等) 子どもがいない、準備が大変、世帯、何らかの年齢に合うように。100才体操は町の方で宣伝、環境。民生委員が持っている集まり、やってみようか、ひきこもりがちの方。 ○ 予防教室20回/年 仙台市の委託、青空教室やウオーキング、ITの活用等を行っている。 ○ 会う事の大切さ、住民の方が再認識している。オンラインの良さ、対面の良さ、両方平行に使えると良い。(会長、飲み会でコミュニケーション) ○ 都市部から離れ、お茶会、食事が少なかったが、最近は再開している。 ○ 飲食を伴う介護予防教室が有ったつながり。 ○ 集まりがなくなった所が再開、ペットボトルのお茶で工夫、感染対策も行っている。坂が多い。3～4年集まらなると登って行けなくなり、デイサービス利用→介護保険の利用に。民生委員と一緒に歩いてくれている。(ポスティング→対面) ○ 70才以上全世帯調査(仙台市)3年ぶりで会わなかったので変化に気づいた。意識の変化。 ○ 全世帯調査(包括): 民生委員の仕事説明。一軒一軒と話。(一緒に回らないか?と行きづらい所へ訪問した。確認して身近な故にどこまでというのが難しい。 ○ 介護予防自主グループの立ち上げ再開。見守りの体制がコロナで減ってしまったがコミュニティづくりもはじめている地域あり。 ○ 孤立を防ぐことが必要 ○ 利府「健康マーじゃん」新規立ち上げ ○ 児童館などと母子支援活動のイベントに参加→高齢者に置き換えて何が出来ないか。 ○ 松島 飲食伴う活動がドッと復活、研修会も実施 ○ 富谷市 行事休止中に役員が退任、やり方が分からなくなった。 ○ 大郷 社協のキッチンカーで「寺カフェ」住職さんからの提案 ○ 将監 サロン立ち上げ多い、マンション単位が多いが戸建てとの壁も ○ 東松島 コロナ禍でも活動止まらなかった。100才体操を継続していた。0or100 すごく大きく再開するところと…。 ○ 長町 自主日休止、コミセン使えなかったり…。今は復帰→既存のところの

後方支援。

- 大和 行政区ごとのサロンは休止→復活 昨年度から戻ってきている。郡部の負担→休みに慣れて集める形で再開できず、訪問等の形で再開。
- 燕沢 運動系の休止→再開しても3人…。介護保険に移行
- 富谷 自主的な活動も再開 行けないという人も増えた。農村地と住宅地の差、お茶飲み↓、コラボしてのイベントも高齢者も多い。認知症も増えている感じも…うーん。
- 八乙女 コロナにて↓もあるが町内会のつながり、町内会どうしの関係性など…。土日の出勤が増えた。

テーマ②「協議体の進め方や内容について」

- 定期的な集まる機会を持つ
- テーマを設定したとりくみ
- 行政の立ち位置が悩ましい→相談相手がいない
- テーマを決めて継続的な話し合い
- 現在立ち上げ中
- 住民に負担感なく参加してもらう
教えてほしい！と区長さん民生委員さん
- 仙台市 圏域会議も協議体に
- 東松島 1層全域 2層8か所 3層…。どう連動させられるか。
地域のつながりづくりからの過渡期 集まりに同じ人しか出て来なくなった。
新規獲得 社協²包括
- 富谷 これから協議体の話がすすむ？圏域は圏域・協議体は協議体（1層）
方向性が定められていないところもある。

テーマ③「生活支援コーディネーターと地域ケア会議について」

- 地域ケア会議苦手→進め方、深め方、会議の持ち方、つなげ方等
- 圏域会議/個別会議に手が追われ（ノルマに追われ他の事に目が向けられない）
- 包括所長がSC プラス面：関係機関動かしやすい、影響が大
マイナス面：他の職員、ノウハウが身につかない。地域の課題を見つけられない。
- コロナ後はテーマを見失う。
- ケア会議課題：困難事例のみ、前向きにやりたい
- ケア会議→主任ケアマネが主
- 圏域会議→テーマを決めて実施
コロナ禍でGWが難しい 今は情報提供のみ。
- 地域ケア会議の前の事前準備、根廻が主要
- 長町 圏域会議4回→駅前+山手側など範囲が広い。総合相談の傾向から認知症についての大きな相談会、どんなことをすればいい？どこにつながるという形でフォーカスして会議を実施。個別→圏域→市へ 資源開発の方向へ
- テーマ②と③の違い、③包括主催で地域課題を。②は何か目的があって行う→圏域
の主体はプロ（困りごとの解決）、協議体は住民が主体（心配ごとの解決）
- テーマ②-③の会議が散らかる。「何のためにやるのか？」を考えてスリム化できるのでは？

	<p>テーマ④「今力を入れて取り組んでいること」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 定量データと定性データ→リアルな声の可視化（課題・心配事→会議の内容→方針→どこまでできた）→箇条書きでいい。ただ話しているだけの会議にならないために。物語性 腑に落ちる説明 ○ 定量データと定性データのアンケートを大学に依頼→学生が集計→学生にも会議に参加してもらおう。包括だけで出来ないことは外部に手伝ってもらおう。 ○ 地域の課題を見つけていきたい。→村、包括で検討していきたい。 ○ マップ作成 ○ 第2層協議体を作りたい。圏域会議的なものを作りたい。 ○ 児童館を活用した他世代交流 ○ 広瀬ウィネット サービス事業所のネットワーク 災害弱者をどう救うか ○ ちょこボラ ○ オレンジ・ベンチ（主催社協） 調整大 ○ 認知症を我が事であること わかってもらう ※マンションの高齢課題 ○ いきいき100才体操（3か月、6か月、1年評価）大郷町 R元、22地区→（9期）R5全地区で行う予定 見守り 支え合い活動 ○ 仙台市 総合事業のみなおし ○ フレイルに対する取組、リハ協会との協働 ○ 2層3層の充実（民生委員等だけでなく、住民参加も促したい）地域の意見交換を2層の協議体に位置付けたい。 ○ 自分事として考えてもらうために、まず自分の生活について考えてもらった。 ○ 利府 「地域活動止めないで!!」 ○ 富沢 「丸ごと事業」障害者の高齢化がある。様々な事業所が一同に集まり顔合わせ。 ○ 松島 地域毎の情報交換会呼びかけ ○ 大郷 「やってみよう!!」という気持ちを大事に ○ 富谷市 地域活動を希望する団体へサポート ○ 将監 町内会多い→ヒアリングしたい 今できていること <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 政治が絡む。 ○ 行政の縦割、地区の担当によるところもある。 ○ 地元住民が地元社協にいる大変さ。 ○ 公私を分けたい。私の方でも楽しめること。 ○ 包括と社協が受ける相談の違い、背負わないで色んな人を頼る。 ○ 団体長に説明して終わりではない。 →長→役員→全員の説明が必要 承認をされるとスムーズに進む。 ○ 同じ内容が多い。○ 仙台市 SC：認知症推進委員 ○ 担い手課題 世代交代が難しい
アドバイザーからコメント	<p><岩渕氏></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 包括支援センターは地域の皆さんから頼られる存在になっており、高齢者の暮らし、生活、生き方そのもの、悩みの相談も多く、地域から期待されている現状である。 ○ コロナ禍中でもサロン活動を止めない支援を包括支援センターは行い、一時停止していた地域の役員からもまた再開したいという相談がある。地域包括支援センターは正に溶け込んだ活動をされている。

	<p>○ 高齢者の相談に限らず世帯単位、児童福祉、生活困窮の相談等、地域によって活動も様々で相談の幅も広い。職員が孤立することなく一緒に活躍されてほしい。</p> <p><及川氏></p> <p>○ 大坂氏が書いた「地域づくりハンドブック」という本がある。何故体制整備事業があって、生活支援コーディネーターが孤立しないためにはどうしたら良いか、過去に行政側から事業の進め方の相談を受けた時、この本を参考に回答し、アドバイザー派遣につないだこともある。皆様も時々振り返りながら、この本やCLCの情報誌を活用して行なってほしい。</p>
<p>全体講評 大坂議長</p>	<p>○ 住民が住み慣れたところで長く暮らすには色々なところにつなぐことが大切、社会参加が健康寿命に大きな影響を及ぼすことを住民に伝え、色々なことをすると良いと思っている人が“孤立”してどうするのか。</p> <p>○ 一人で考えないで組織の中で対話し自分の仕事を理解してもらう。次に外の人とつながり対話しながら自分のことを理解してもらう。生活支援コーディネーターだけが地域づくりをしているのではない。</p> <p>○ キーワードはどれだけの人自分が手伝ってくれるか、どれだけの人自分がつながるかが、これからの皆さんの成果につながると思う。</p> <p>○ 一人一人能力が無い、仕事が出来ないということはない。話して違和感が無かったということは皆同じ方向性で仕事をしている、色々な働きかけをして仕事をしている、自信が持てないでいる時は対話の活動を繰り返してみよう。</p> <p>○ 住民の健康寿命を延ばし、ちょっと弱っても地域に帰ってこられる仕組みが必要。皆さんの仕事は心配ごとを困りごとにしないうための仕事。心配ごとを皆で話し合うところが協議体、困りごとを話し合うのが地域ケア会議。皆が腑に落ちるように上手に説明し、つながっていく。ポイントはどれだけの人とつながり、どれだけの人と一緒にやれるか、住民が長く住み続けられるためには人生楽しめるかどうかである。集いの場も楽しいところにすることが大切。</p>

区分・会場	県南部 大河原合同庁舎 別館2階第2会議室
開催日時	令和5年12月15日(金) 午後1時30分から午後3時30分まで
出席市町村 (出席者数)	白石市(2)、名取市(3)、角田市(4)、岩沼市(6)、蔵王町(1)、七ヶ宿町(1)、大河原町(2)、村田町(1)、柴田町(2)、丸森町(3)、山元町(6) 合計31人
アドバイザー (連絡会議会員)	東北福祉大学 教授 高橋 誠一 氏 仙台白百合女子大学 准教授 志水 田鶴子氏 宮城県社会福祉士会 真壁 さおり氏 公益財団法人さわやか福祉財団 インストラクター 渡辺 典子 氏 角田市社会福祉協議会 事務局次長 岡本 圭一郎 氏
オブザーバー	なし
情報交換での 主な意見・内容	<p>テーマ①「コロナ5類移行後の取組や発見」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 活動休止→生活様式変化→令和5年からコロナ5類になり活動が再開してきたが、各自の様々な場へ参加しなくなっている人も多い。 ○ 地区役員等の高齢化が進み、主となって活動していた人から新たな世代への役割つなぎがなく、元々役員の方々も活動(気持ち・体とも)しづらく、地区活動として活動のしにくさが出てきている。そのため、新たな活動を取り入れている団体もある。 ○ 外食含めた活動や活動メニューも増えた。 ○ 男性も参加する取組 ○ 介護予防で町づくり ○ アプローチに変化は特に無し。 ○ 社協の助成金を活用し、4～5人で家を回りながらお茶のみ会を再開している。 ○ ラジオ体操の立ち上げを支援した。(集会所など) ○ 1層と2層が連携して、町の健康教室の卒業 ○ 人との関わりを拒否する方も出てきた。(特に男性) ○ 解散した通りの場もあった。(コロナを心配する人と活動したい人で意見が割れることも多かった) ○ 訪問型Voのマッチングが増えた。 ○ 健康や認知症予防、介護予防系の取組は住民の反応が良い。 ○ コロナにより活動に変化がなかったため、継続している。 ○ 研修旅行や食事を再開した団体にお邪魔することができた。 ○ マップを作成し、各地域の資源を表にまとめている。 ○ 祭りなどを通して、子どもたちと地域のふれあいが増えた。 ○ 地域の人たち、70歳まで働いている人も多いため、シニアが集まらない。 ○ 移住の人たちと、里山のモデルルームでかまどのご飯を作ったり、古民家のシェアハウスで移住者と里山暮らしを体験したり、過疎地域だが次の世代に伝えていく活動。 ○ 今後は、商店など色々なところで活動できれば良い。また、福祉課だけではなく、色々な課とつながっていくようにしていきたい。 ○ コロナ5類になり、様々な活動が再開するようになった。 ○ みんなの食堂という名のこども食堂が立ち上がった。移動型なので、設備のある集会所で活動している。(高齢者の利用が多い) ○ 個人宅での集まりは、コロナ禍でも継続されていた。

テーマ②「協議体の進め方や内容について」

- コロナをきっかけにノウハウが途絶えて、祭りを開催しなくなったところもあり、地区によって差が出ている。
- 料理教教室やこども食堂も復活し始めている。誰かに見てもらう、食べてもらうことは、とても大切。
- CMとコーディネーターのコラボ
- インフォーマルな情報がCMに知られていない。インフォーマルとCMをつなぐ役割
- マップをCMに提供している。
- 住民の集まりの話合いを大事にする。
- 形にとらわれず、協議体的なものはどこの地域でも行われている。
- 継続して協議体を続ける難しさもあった。
- 1人でのマップ作成は困難だが、協議体がそこにつながらない。
- 「なじよすぺ会」を月1回程度開催（区長、民生委員、社協、包括等）

テーマ③「生活支援コーディネーターと地域ケア会議について」

- サロンが少ない地域に向けた研修会
- 社協や町の職員と連携
- 個別会議に積極的に参加している。
- 事例の選定に気を使っている。
- 困難ケースの会議が多いので、Coが出席する機会が無い。
- 個別会議から吸い上げたものを今後、町課題につなげられたら良い。

テーマ④「今力を入れて取り組んでいること」

- ウォーキング講習会
- サロンと書かずに開放日を設ける。
- 体制整備の広報誌
- 月に1回コーデ部会（市と1層と2層）
- 出前講座
- 主任ケアマネと住民が集まる機会作り
- サロンマップの作成（移動販売）
- 自治センター訪問
- 何に力を入れるか、どう取り組むか（地域である事柄を資源として捉え、伝えつなげていくか。）
- 情報整理をして見える化を図る。
- 働く場（資源の1つとして）
- コロナが終息し、立て直している。色々なつながりを強くし、連携できれば良い。
- Coと目的を共有できれば良い。
- 地域資源のマップ作り
- 世代交代できてくれば良い。
- 集落支援員（一人暮らし訪問や移動支援している）とCoの情報交換が始まった。
- サロンに来ない人に目を向けていきたい。

	※その他意見等の意見交換無し
アドバイザーからコメント	<p><志水氏></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ワークいただいたテーマを見ると、コロナだけでもキーワードになっている。コロナをきっかけにして変化があったのか無かったのか、色々な研修のテーマになるが、我々自身の暮らしに大きな影響を与えたことがあり、そのような体制の中から地域を眺めてみると我々以上に働いて日々体を動かしている人以外の人にとっても大きな意味があるということで、関心が非常に高いのかもしれない。 ○ それは凄く大事で活動性が低下するのは体に与える影響は凄く大きい。その人が何十年も経った後に今ある体質が維持できるのか、数年だけ見ても分からないが、その層の人達が重度化していくことで国の財政をどれだけ圧迫するのか地域のつながりを長期的に見ながら、今やることに目を向けていくことが大事ではないかという話を伺いました。 ○ 色々なところの資源があり、仙南地域はスケールメリットがあるので、そういうところを見た時に、社会参加はサロンに行くとか体操のような狭く考える必要はない。働けるなら働ける場所があった方が良く、グループを作って研究室のようなところがあっても良い。学校行事を手伝ってくれるところを地域から動員するという形もあるかもしれない。人が不足しているので働きたい人がいるならそういう人をマッチングして地域とのつながりが広がっていくことを維持してもらえれば健康づくりにもなっていく。 ○ 社会参加がキーワードになってくると思うので、行政では住民と接点を持っている部署でちょっと目的が重なる部分があれば、どうしたら多くの方が社会参加してくれるかということ。住民をきちんと層として認識することが重要で、色々な活動に来ている方は良いがそういう方ではなくて自分たちが働きかけなければ巻き込めない人はどういう人かということを中心に認識して、特に個別支援ができる所属の方たちはそういう層の人たちを捉えたら一般の社会参加ではない参加もある。 ○ 漠然とした認識ではなく、対象を認識した上で、どういう切り口の中から社会とつながり進めていくか、今後は正確に組織の中でアプローチをしていかなければならないと思う。 ○ 今までだとぼんやりとした地域づくりという言葉だったが、それぞれの社会参加の頻度が上がることが地域づくりにつながっていき、住民の皆さんの願いでもある。それを実現していくために、それぞれの所属組織の強みを活かしていくことが重要だと思う。 ○ 継続は重要だが後継者がいない、活動が立ち行かないこともあると思うが仕方がないかもしれない。活動したい時には他のところもあると広がるので、住民その人たちのものなので、どう考えていくのかということところです。 <p><真壁氏></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 報告されている皆さんは結構無意識で取組まれている。自分が取組んでいることがどういう意義があり、今どういう段階の取組で、それはどのようにいつ目標を達成するための、どのステップに居るのか。もっと意識的に自分で言語化し、これからもっと大事になってくるのではないか。 例えば角田市の方は自治センター回りをしているが、自治センター回りをするのはどういうことなのか。おそらくキーパーソンのヒアリングをしているということ。それは地域課題の把握のために行なうことだと思う。キーパーソンにヒアリングをするのは手法の一つである。アンケートを取るのも地域課題を

把握する手法の一つ。

主任ケアマネと住民の交流会の場づくりをしたというのも素晴らしいことだ
と思う。交流会で住民の話を聴くことで住民の感じている情報を得ることにつ
ながり、個別のヒアリングや交流会で住民の皆さんからお聴きすることをやら
れている。

- どの程度認識しながらコーディネーターの皆さんが実践するのは大事。
- サロンのデータをアップし、広報するのも何のためにするのか。コーディネーターの活動やこの事業、地域づくり、住民が中心となって地域づくりを行う時に、色々な情報を集約して発信することが大きな目的で、サロンマップや広報誌等の手法で皆さんは実践されている。その他にも情報発信の方法は色々あり、例えばソーシャルメディアやフェイスブックを活用している組織もある。ウェブサイトを工夫する、QRコードで読み取ると色々な情報が簡単に見えるようになる。情報発信に工夫するという方法もあると思う。
- 河川敷でウォーキングしている人のネットワーク化ではウォーキングしている人に着眼しネットワーク化する。個別で健康づくりに力を入れている一方で、それができていない方もいる。個別の課題を地域の課題にしてネットワーク化し、全体の取組につなげていくことだと思う。個別の課題を地域課題にして、それを行動に移していくような後押しをコーディネーターがしているのかと思う。
- 蔵王町ではサロンの開催具合が地域によりムラがあるということで、そこが課題と分かり、それを解決や改善のために3回連続で住民を対象にしたサロン研修会を開いた。1回目はサロンで集うことの意味は何かを住民の皆さんにお伝えする、2回目は集いの場を立ち上げるにはどうしたら良いか、3回目は専門職に入ってもらおう形で行った。

課題をどのように解決していくか連続の研修会で手法について実現した。何のためにどのような手法で、今このタイミングでやる。意識的にしている部分もあるが無意識で行っているところも多いのではないかと。是非その辺りを言語化しながら、更に取組を進めていただくといいのではないかと思った。

<渡邊氏>

- 自由にお互いの状況を沢山話し合う中で、情報共有がされたのではないかと思う。
- 話の中心はコロナが5類になってからの状況についてだったが、すべての項目に関連してくる。4つの項目にかなり重なった話だった。コロナで弱くなった地域もあれば、コロナだからこそ地域でやれることを考えてやろうとする地域もあった。
- 様々な状況があるが、支援者として再開支援、新たな地域で建て替える状況のところへのバックアップ、情報提供など様々な状況に合った支援をされていた。
- 共通するところが、より小さな地域間のつながりがコロナの状況に影響されることなく関係が続いていたことに気づかされた。
- 小さな地域と言われる単位が身近な地域での支え合い・助け合いの大切さを話の中から、改めて皆さん再認識されたような感じだった。
- 沢山の取組の発表が聞かれた。学校の中にいつでも地域の人が行ける部屋があり、そこで子供たちと交流している取組、多世代で身近な地域でお料理を作って皆さんで食べる活動も聞かれた。
- 安心して住み慣れた地域で住むことができる地域は我が事としてお互い見

	<p>守り合うことができる地域だと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ より小さな単位のつながりは困っている人が居たらすぐ気づくことが出来、お互いさまの声かけや支え合いが自然にできる単位で、色々な状況の人も受け入れ、そのような状況でも交流を行うことができる。 ○ 連携に関しては、どんなことがコロナに影響されることなく続いていたかを通して、隣近所の単位の大切さを改めて再認識された。 ○ 協議体は活動や住民の話し合いの場が一番大切なので厚労省のモデルに捉われることなく柔軟な形で良く、そこで話されたことを大切に記録して活かしていくのも大切だと思う。 ○ 既存のものに捉われず、柔軟な形でより本質に近いところに戻って、これからまた進められると良い。 ○ 8年前情報交換会で集まった時の話の内容よりも、今はより核心に近いところになっていると思う。 ○ 今やっていることがどんなことにつながっていき、どんな人がどんな人に関わって、地域の人々の安心な生活につながるのか、時々振り返り意識してみるのも良い。 <p><岡本氏></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 皆さん工夫して活動している、地域住民の力はすごいと改めて感じた。 ○ まちづくりの話が色々なところで出ており、マップづくりでも行政側の目的とコーディネーター側の目的が違う感じがする。双方が妥協した、目的に近いものをすり合わせて作る必要性がある。 ○ 行政サイドでは結果のひとつというのがあるがコーディネーターのマップは住民側のやる気や「こんなことをやってみたいな」というきっかけづくりになったりもする。市町村と受託をしている側で共有しておく必要性を感じた。 ○ 協議体の話も出ていたが今日のような話し合いをしている協議体ならすごく住み良いまちになるのではないかと。活発な話が出ていて、何ができないということだけでなく、できるためにはどうしたら良いのかアドバイスしたり、意見を出したりするのが大切だと思う。 ○ 仙南地域では交流しながらの情報交換会が少ない話もあり、こういう機会が作る必要性もあり、私も社協としてそのような機会が作れるよう取組んでいきたい。
<p>全体講評 高橋副議長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 皆さんのお話の質がだんだん上がってきているという気がした。最初の頃と比べると違ってきているのは経験を積み重ねて、その経験を皆さんしっかり受け止めていると感じた。 ○ 経験を積んでいるグループでは歴史を語れるくらいの方も居て、本質というか、この事業の外せない真ん中をしっかりと押さえて、色々な状況にも柔軟に対応しているように聞こえた。 ○ 住民の方がどうしたらこの地域に暮らしていけるのか、色々な工夫をして暮らしているところをしっかりと見ている。その場で起こる状況にどういった支援をしたら良いか、色々工夫されていることが分かってきた。 ○ 最初の頃、この事業はどこに中心があるのだろうかと思っていたように思うが、新しい方も情報交換会や研修を受け、「この事業はこういうところが基本だな」とか、自分たちの地域やまちに帰ってどうなんだろうかと積み重ねてきていると思う。 ○ どうしてもこちらが望むことをやってもらうことは難しいが、住民の状況を見ていると、工夫されてやってきていることを起点にしている。住民の方がや

り易い環境を作る視点が結構あるのではないかと思いついて聞いていた。

- ユニットケアのオンライン発表会に参加して、なかなか食事の進まない方がいて、この方に色々支援しているという発表があった。食事は楽しいものなのに、それまでの食事が健康でいていただきたいとか介護予防の食事だった。こちらが変っていくとその人も元気になっていく。何かさせようとするとその方は上手く対応できないが、やり易いように変えると率先してできることが見えてきたという発表だった。
- 我々何のためにしているのか考えていかないと。大変無駄をしている時間はない訳で、皆やり易い状況を作ると長続きし、楽しいと健康にもつながり、その人なりの暮らしにつながると発表されていた。
- 地域づくりもパラレルである。今までは地域づくりと個別ケアを分けてきたところがあり、専門職も個別と地域づくりに分けてきたが、昔どのように暮らしてきたのか、昔の暮らしと地域がつながり暮らしの支援をする。施設の中に居てもそうやって広がっていく。
- 施設の中で何とかしようとする発想からこの方の暮らしを見ていく発想になっている。
- 地域の中で暮らしているのも、その人の地域での生活を考えていくと、困りごとでも結構地域の方が気にされている方がいる。色々やっていくと専門職も気にしているが地域の中で心配している人につながり、地域の方ができることを増やしていけるような、そういう縁も生活支援コーディネーターには必要なのだろう。色々なことをしているうちに上手くいったりいかなかったりまだ積み重ねの中にあるとか、経験の中の積み重ねでこられたのではと聞いていた。
- この事業は何年も続いているがなかなか成果が出ないと言われるが、本当は水面下でそれぞれの地域でコーディネーターの方が色々な成果を出しているが、それを評価できる取組が出来ていないのかなと思った。
- 宮城県は全国的にもこの事業に力を入れてきたが我々も宮城県らしい評価の仕方を改めて考えた。今回の情報交換でも外からの評価よりも、お互い評価し合えるところが大切だ。見える化して皆で共有することができれば、まだまだ良くなるところが沢山あるのではないか。
- 良い機会を与えていただいた情報交換会で、こういう機会を次に活かして、日頃からもお互い小さな情報交換会、コーディネーターの地域の集まりをしていただいて、悩んでいることを共有しながらお互いにサポートし合えると良いと思う。

区分・会場	県北部 サンシャイン佐沼 鳳凰の間
開催日時	令和5年12月19日(火) 午後1時30分から午後3時30分まで
出席市町村 (出席者数)	石巻市(4)、気仙沼市(10)、登米市(7)、栗原市(13)、東松島市(3)、大崎市(2)、加美町(2)、涌谷町(1)、美里町(1)、女川町(2)、南三陸町(5) 合計50人
アドバイザー (連絡会議会員)	東北こども福祉専門学院 副学院長 大坂 純 氏 仙台市地域包括支援センター連絡協議会 幹事 菅原 幸江 氏 宮城県社会福祉協議会 地域福祉部長 及川 一之 氏
オブザーバー	宮城県東部保健福祉事務所(2)
情報交換での 主な意見・内容	<p>テーマ①「コロナ5類移行後の取組や発見」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 3年間で高齢化が進行し、活動の継続が難しい。 ○ 窓口、計画、財政が異なっていると、事業が上手く進まない。 ○ 令和5年は、地区民運動会、夏祭り、防災訓練などが復活した。 ○ 3年間活動できなかったが、地域は意外と大丈夫?かも。 ○ 自分事として考えることが必要。 ○ 何かやろうとした時に慎重派がいるので、前に進まない。有償ボランティアは次に進みそう。 ○ 南三陸 自主活動、体操(103団体)がコロナで高齢化しており継続が難しい。そのため子どもと交流、講話など聞きたい。 ○ 東松島 人が集まりにくくなった。お茶のみは音楽を聞くのみ。男性もきている。 ○ 登米 2層の中心が活動になっている。プレイヤーになっている。コーディネーターも行政も何のための手段なのかを確認する。(手段の目的化) 訪問販売のニーズ調査→高清水の業者、情報共有(津山) ○ 涌谷 見守り、集いの場をタイアップ。イスを作って公民館、企業、商店街に見守り依頼。 ○ 一迫 スポーツが盛ん。栗原元気アップ体操がコロナで休止し、再開できていない。 ○ 高清水 ラージボール、家庭バレーボール等、スポーツが盛ん。室内での趣味の集まりの継続。お茶っこ会。 ○ 気仙沼 休んでいるところがやめたり、コロナ禍でもサロンやってたところはやっていた。商店街(町場)は休止、その間に引きこもり入所になることも。 ○ 東松島 サロンはコロナ禍でもやっているところやっていたが、3~4か所は、休止後中止。(再開難しい)麻雀、マレットゴルフは地区ごと交流大会など開催している。育成会との関わり方が問題(意見の食い違い) ○ 大崎 3月に小学校閉校。10行政区の集会所で年2回のお茶っこ会。お茶のみクラブは中止。カラオケは休止。スマイルボウリングは月1回継続。 ○ 東和 コロナで休止していた公民館で共催事業を再開。 ○ コロナ禍でも継続しているところは継続していた。休止→中止になったところもあり、休止→再開するのは困難。 ○ サロンが再開してきている。 ○ 夏は暑さで活動ストップしたが、秋くらいから活動が増えてきている。 ○ サロンでも会食することが増えてきた。 ○ 石巻 南三陸 Coがついていけないくらいにやる気が出てきている。 ○ 女川 気仙沼 活動が増え、動き出しているのにいけない。情報が入ってこ

ない。

- 地域は止まっても Co の仕事、社協の仕事は減っていない。
- 目標に向かって行う事ができた。
- 若い世代は土日、高齢者は平日に活動。
- 住民は活動していた。
- 地域住民との関わり方。
- 土日事業に参加しないと情報不足になる。
- 見守り活動は、民生委員、包括と連携している。
- 復活しており、支え合いの力は捨てたものじゃないと実感。
- フレイル状態、認知症の人が増えた。
- 住民主体の配食サービスを開始した。300円で作ってもらい、様子を見にいくツールとして見守りにつながっている。→包括や民生委員に様子を伝え、地域の中で情報共有ができています。

テーマ②「協議体の進め方や内容について」

- 改めて「話し合いをしましょう」みたいなものはない。
- 地域に入って「疑問」「こんな風にしたい」というものを聞き出す。
- かた苦しくならないよう、地域に出て地域を知る。
- 石巻 福祉推進委員会の会場を公民館に変更。雰囲気が変わり良い方向になった。自分の地区の生活ニーズにあった意見がでるようになった。最初は年1回だったが、今では年4回開催。
1層…会話で話すということにこだわらず、話せるメンバーを選定してワーキンググループをつくりそこで今後の進め方や研修会の内容等について協議している。
2層…それぞれの地区の SC が中心となり黒子となり、メンバー選定し話し合いを進めている。他地区の関わりがわかるよう1層コーディネーターが16地区の活動内容を集約し発信している。2層メンバーを集めた研修会を今年度も初めて企画し実施した。
- 栗原 メンバーは、福祉施設の方や学校関係者、まちおこし、商工会。会場は、今年酒蔵にして楽しみを入れている。栗原市がデマント交通、路線バスの組み合わせを発表している。新聞屋も入っていて、「コミュニティ新聞」を作っている。名札を使用し、グループワークも行っている。
- 気仙沼 メンバーは、地区社協、会長等が変更になると体制が変更になり、今も会長と相談にのったりしている。今後、住民アンケートを考えている。自治会が振興会などの活動についてそれぞれの情報を2層 Co が伝えてくれる。意見が食い違ったりした場合などに調整して、話し合いしやすいようにしてくれている。担い手の育成。移手段。配食サービス（配達してくれない地区への支援）。男性の参加を促すためにどうしたらよいか。
- 女川 住民の方から意見を聞いて土日に開催。
- 一迫 事業計画→議論（人生の先輩にやってもらっていいのか）
- 地区全戸にアンケートを配布し、地域の困り事について調査、除草・除雪・子どもとのつながり・ゴミ・移手段について協議し、①自分たちでできること②地域でできること③行政ができることに振り分けした。
- 3層（身近な地域）での話し合いを行い、生活、地域に即した内容で協議。
- いきいき100歳体操、取組団体へ、機会（DVD等）や運動器具貸与。
- 南三陸 グループワークでの意見交換をたくさんしている。そこには、県社

協、県社福士会から講師の方に来ていただき、自分事として捉えてもらえるように話をしている。「地域包括ケアって何？」が参加者に分かるように何度も伝えている。部会員一人ひとりが自分のありたい暮らしはどんなものかを話し合っている。

- 東松島 1層…地域支え合い推進委員会の他、ボランティア福祉ポイント部会生活支援部会を設置。ボランティア福祉ポイントは導入するか等について検討。生活支援部会では地域ニーズの洗い出しと支援サービスの検討。
2層…8か所設置。生活課題について意見交換及び協議。
3層…令和4年度末38か所設置。気になる高齢者について地図を用いて話し合い。

テーマ③「生活支援コーディネーターと地域ケア会議について」

- CMさんへの役割、周知
- SCの地域ケア会議への出陣
- JCから専門職にアプローチ
- 呼ばれるのを持っているだけではだめ。
- 直接人に会わないと人をつなげない。
- 栗原市築館志波姫ハ、生活支援コーディネーターも入って、個人のケア会議に参加していただいている。その方にとって、地域のお宝を知り社会資源を知っているのかが、コーディネート策なのではないか。
- 他地区は個人のケア会議には、コーディネーターは現状では参加していない。地域のケア会議に入っている。
- 地域ケア会議にSCも参加し、インフォーマルサービスにつなげていく。
- フレイル予防講座（運動編・栄養編）についての地域のケア会議
- CMにもSC含め、生活支援体制整備事業を周知する。

テーマ④「今力を入れて取り組んでいること」

- 令和3年から生活動作アンケートを行い、集約して地域別、年齢別に共有。
家の外のこと→草取り、雪かき、ごみ出し
家の中のこと→掃除、洗濯、食事、お風呂
- 栗原市 集いなどの活動のガイドブック作成中（令和6年度に配布）区長、ケアマネなどで共有。地域の情報誌発行（年4回）。助成金で車を購入し移動販売を開始している。社協SCは、後方支援をしている。
- 登米市 ガイドブックが形になっていない。A3で現場ごとにまとめて可視化したい。
- 涌谷町 39行政区の実績集を作成し、配布している。（毎年更新）
分科会（見守り、移動、ゴミ出し）、研修会（フォーラムを年1回）
- 東松島 モデル事業としてゆるやかな見守りを実施している。生活支援サービス一覧を関係者へ配布。
- 南三陸 通い、集いの場のデータは、ケアマネ情報交換会で共有している。そこで配食サービスの情報も共有。くらしとコミュニティ（1層）マンガ（包括ケアの広報ツール）を令和6年から公開。
出前講座・・・申込から地域活動に入りやすい。DVDで協議体の活動の様子が分かりやすく説明されている。
「まいどお馴染み！社協スタッフが地域を廻って学びと笑いをおすそ分け」チラシ利用。2月末にDVD化（マンガで事業説明書を作成していた）。

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 気仙沼 地域の活動をパネルにして展示している。(見える化している) 支え合いフォーラム開催。集まるきっかけとなった「青空喫茶」 コロナ5類になり、サロン再開に向けて2層 Co が支援している。新しいマップ作りを行っている。市のホームページにもサロン一覧の掲載とサロン、自治会向けの講師リストを冊子にして配布している。新しい活動として、1層、2層による介護予防を目的としたeスポーツ体験教室を行った。 ○ 石巻 こねっと発行。体制整備事業。世代間の関わりから若い世代への集まりへ。個人活動が地域支援につながっている。16地区で2層が立ち上がったところ。改めて何をするか、何をしなければならないのか再確認する。また、2層の方に再確認してもらうことに力をいれている。研修会で事業の概要を確認したり、グループワークでお互いの活動を共有。 ○ 女川 3層より、2層・1層につなげる。住民に変化が出てきている。外に出てこない人にアプローチすることが大切。座談会を開催した。参加する機会を増やす。 ○ 登米 移動手段に力を入れている。(いしこし助け合い有償事業、コミュニティシェアリング、住民・市民バス乗り継ぎ) ○ 協議体の委員に先生になってもらい事業を行う。 ○ 地域の男性の集いの場づくり ○ ガイドブックを作っている。(行政サービス、趣味活動の紹介等) ○ CMの同行訪問 ○ 協議体委員に自身(委員)の役割を知ってもらう。 ○ 住民を味方にする。→誰のためにやっているのかを忘れてはいけない。 ○ 声をかけてもらえる存在になる。 ○ 社協の出前講座 ○ 資源の見える化 <p>※その他意見等の意見交換無し</p>
<p>アドバイザーからコメント</p>	<p><菅原氏></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 各グループの話をお聞きして、改めて地域の支え合いについて考えさせられた。 ○ 生活支援 Co の皆さんは、色々なアイデアを出して、活動の成果を出すために頑張っている。誰のための支え合いなのか、原点に戻ることができた。 ○ 成果が見えにくいと言われる中、漫画や情報誌を作成したり、SNSを活用したりといった工夫が見られる。 ○ 余談ではあるが、加美町に住む親戚がサロンや地域活動の話をしていて、参加することを楽しみにしている様子だった。地域活動や支え合い活動に関係者がしっかり取り組まれていることを感じた次第である。 <p><及川氏></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 情報交換会は、参加者の皆さんがたくさん話をできるように、工夫しながら実施してきた。 ○ 皆さんも協議体や活動に工夫しながら取り組まれていることがわかった。 ○ 行政担当者や生活支援Coが変更したりする中で、悩みが出てきた際にはアドバイザー派遣等を活用していると思うが、あわせて、年度末や年度の間で地域づくりハンドブックを用いて、事業の振り返りを行ったり、関係者間で読

	<p>み合せたりして、目線を合わせることも必要と感じる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 事業を進めるには、それぞれが孤立してはいけない。支援者側も皆で支え合わないといけない。 ○ 今日はたくさん面白い話が出ていたので、事務局からのまとめを楽しみにしてほしい。
<p>全体講評 大坂議長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 笑い声が多く、楽しく取り組んでいただいたようで良かったと思う。 ○ 住民目線で仕事をする時には、住民が楽しくなければならぬし、支援する側も楽しくなければならぬ。 ○ 自分たちの仕事を住民に説明することができるか考えてほしい。 ○ 例えば、地域包括ケアシステムを住民に理解してもらう時に、「心配ごとを困りごとにしなすための仕組み」ということができる。 ○ 第9期介護保険事業計画と高齢者保健福祉計画を読むこと。それが活動の根拠となる。どう事業を展開するか、計画を作成した人と共有した上で進めることが重要となる。 ○ 協議体を作ること、開くことは事業の目的ではなく手段となる。手段を活用して、住民の願いを叶えるためのお手伝いをするのが地域づくりである。 ○ 大変だが、仲間を作ること、特に組織の内部で一緒に協力できる人をたくさん作ることが重要となる。 ○ 委託元、委託先、包括等、関係者と対話を重ねながら活動を進めることが基本となる。